
太陽

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽

【Nコード】

N0318T

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

エミリアは叔母のパン屋で働いている。あるとき笑顔が素敵なお客様が気になるようになって……。

太陽の笑顔

エミリアは彼の姿を見つけると、シャッターに掛けていた手を下ろした。

「もう遅いかな」

「いえ、まだ大丈夫ですよ」

エミリアが働いているパン屋「ゾネ」は小さな駅のすぐ近くにある、とても小さい店だ。エミリアは毎日閉店間際にパンを買いに行く背が高く、いつも笑っているような、照れているような顔をした彼が来るのを心密かに待っている。

初めて会ったのは、エミリアが「ゾネ」で働くようになって三日経ったお昼だった。その日は休日でも黒い雨がシトシトと降っていた。小さい雨粒がもの寂しように、申し訳なさそうに降っているように見えたのは、エミリアがまだ「ゾネ」に慣れていなく、エミリア自身が居心地が悪かったことが理由かもしれない。

とにかく、エミリアはため息を吐きながら、お客が一人もいない、パンだけが所狭しと並べられた店内と、音もなく雨が降る外の景色を見比べていた。

カランカランと店の扉のベルが鳴り、一人の男の人が入ってきた。

エミリアは

「いらっしやいませ」

と暗い気分を振り払うように明るく言った。見ると彼は傘を持っていなかったようで、黒い髪とシャツがしっとりと濡れている。少し迷って、そしてエミリアはおずおずと彼にハンカチを差し出した。

「良かったら、お使いください」

彼は驚いたように顔を上げ、そしてにっこりと、笑って、エミリアのハンカチを受け取った。

「ありがとう」

エミリアはそのときの彼の笑顔が忘れられない。彼ははつきりと笑ったのだ。まるで雲がさあつと晴れ、太陽が美しく輝いたように。

彼はそれから毎日のようにパンを買いにくるようになった。

「このパンは、この前食べたのだけど、おいしいね」

「ありがとうございます」

「何かお勧めはあるかな」

「今はプレツチエンが焼きたてで、お勧めです」

エミリアは一言二言の彼との会話が楽しみだった。たいていは緊張してそっけなくなってしまうと、後で反省した。

彼はあるとき言った。

「仕事が忙しくなるんだ。お昼にここに来ることが出来なくなってしまう」

「そうなんですか。大変ですね」

エミリアはさびしく思ったが、口には出さなかった。

「閉店時間ぎりぎりになるかもしれないけど……」

彼は言いにくそうに右手を口元に当てた。

「迷惑じゃなかったら、仕事の終わりに寄ってもいいかな」

「はい、もちろん。うれしいです」

またお店に来てくれるんだ。エミリアは嬉しくなり彼の顔を見上げると

「良かった」

と彼はにっこりと笑っていた。

その日から「ゾネ」の一日最後のお客は、エミリアが待ちわびる彼となった。

「今日も来ないわ」

エミリアは閉店時間を10分過ぎて、「ゾネ」のシャッターを下ろした。ずっとシャッターに手を掛けて通りを見つめていたが、彼が

現れることはなかった。

彼がお店に来なくなつて一週間。エミリアは冷たく凍えてしまった手をぼんやりと見つめた。

（私はどうして彼を待っているのかしら）

エミリアは考えた。かじかんだ指を少しづつ握りながら、頭に浮かんでくるのは彼の笑顔だった。

（名前も知らない、ただのお客さま。彼が「ゾネ」に来なくなれば、私は会えなくなってしまう……）

エミリアは街灯がさびしげに灯る通りを見つめた。彼がいつも小走りで行ってくる向こう。どんなに目を凝らしても、そこには暗闇が広がるばかりだった。

エミリアは町に色とりどりの花が咲くころ、結婚式を挙げる。

「お祝いの手紙、たくさん届いてるよ」

静かな朝、エミリアが紅茶を飲んでみると、叔母が郵便受けから10数通ほどの手紙を持ってきた。脇に抱えていた新聞をテーブルにぞんざいに置くと、そのうちの一通を声に出して読んだ。

『親愛なる、パン屋のゾネさま。この度はエミリア・ガロツティ様のご結婚おめでとうございます。いつもエミリア様の笑顔には癒されておりました。エミリア様の笑顔を独り占めされてしまうなんて悔しいです……』

「だーれ？ それ」

エミリアは苦笑しながら訊いた。叔母は困ったように言った。

「ミロラドビッチよ。あの子こんなふざけた文章書いて……」

「叔母さん、分かってるわ。ミロとは長い付き合いだもの。許してあげて」

「あなたが良いのなら、いいわ。じゃあ次」

『結婚おめでとうございます。エミリアが結婚すると聞いたとき、とても驚きました。少しぐらい相談してくれても良かったのに。友

達として私の次に幸せになるよう祈ってます』

「それ、ケイトね」

「正解よ」

エミリアは友達の顔を思い浮かべた。ケイトは遠くに住んでいる友達で、二週間後に控えるエミリアの結婚式に、わざわざ飛行機で来てくれる。

それから次々と叔母は手紙を読んでいった。そのたびに書いた人の顔を想っては、エミリアは幸せな気持ちになった。

「これが本日、最後ね」

叔母は仰々しく一通の手紙を開いた。

『結婚おめでとうございます。エミリア様。私はあなたのお名前を呼んだことはありません。だからこの場でこうしてお名前を書くことに、少し違和感がございます。いつもの通り、「パン屋さん」と書こうと思います。パン屋さん、とてもおいしいパンありがとうございます。毎日食べても全然飽きませんでした。しかし私がゾネに通っていた理由は他にもあります。それはいつも明るく接客してくれるパン屋さんです。仕事で疲れているとき、嫌なことがあったとき、あなたは私を太陽のように照らしてくださいました。ありがとうございました。とうございました。いつまでもお幸せに』

「あら、知らない名前ね」

手紙を読み終わった叔母は、首を傾げてエミリアに手紙を渡した。

エミリアにも手紙の差出人の名前に心当たりはなかった。

「誰かしら」

「そうねえ。文面からしてお得意様よねえ」

エミリアと叔母は二人で考えていたが、しばらくして諦めた。

エミリアは結婚を機にエミリアの叔母が開いたパン屋「ゾネ」を正式に引き継いだ。

「ゾネ」意味は「太陽」。エミリアは思っていた。差出人の分からないあの手紙に書いてあったような、太陽のように人々を少し

でも暖かくしてあげることのできるパン屋にしていこうと。

エミリアはパンの仕込みを夫とともに始めていた。まだ太陽が昇る前。あたりは暗闇に落ちている。

「そう言えば、昔とても笑顔が素敵なお客様がいたわ」

エミリアは仕込みの手を止めずに言った。

「へえ」

エミリアの夫も忙しく働く手を止めない。エミリアは思わず笑顔を作って

「どうしているかしら」

と呟いた。

キラキラと朝日が昇り始める。今日は気持ちの良い、晴天だ。

太陽の笑顔（後書き）

お久しぶりです。

久しぶりに書いたので、変な文章があるかもしれませんが、ご指摘、ご意見、ご感想。よろしければ、よろしくお願いします。

次に彼目線の文章を書いたら、おしまいです。

太陽のいらっしゃいませ

ライツェンシュタインは雨の中を走っていた。仕事場から出る時は小雨だった。仕事に必要な資料を会社に取りに行った帰り道だった。この土地は霧の出るときもある。強い雨には変わらないだろうと思っていた。案の定、雨は駅の近くになってもパラパラと降り続いたが、ずぶ濡れになるほどでもなかった。

ライツェンシュタインは日ごろ目にしてきたが、一度も入ったことのないパン屋に入ってみた。何が彼をそうさせたのかは分からない。ただふとこげ茶の看板が目に入り、ウィンドウに並ぶパンが見えただけだ。通りに面している店は小さく、一度通っただけでは見逃してしまいかもしれない。けれど白塗りの扉を開けると意外に中は広く、こざつぱりと清潔で白い壁に茶色い棚が並び、かわいらしかった。

戸に付いていたベルが鳴り、店員が顔を上げた。

「いらっしゃいませ」

高い声が店内にいき渡る。

ライツェンシュタインは一呼吸置いて、彼女を見た。目が合うと店員は少し目を逸らし、意を決したように言った。

「あの、よかつたら使いますか」

店員からかわいらしいレースの付いた白いハンカチを、ライツェンシュタインは受け取った。

ライツェンシュタインはその日から頻繁にパン屋に通うようになった。お昼ごはんにと、買ったプレッツェルがとても香ばしく、美味しかったからだ。

いつからだろうか。ライツェンシュタインがパン屋に通う理由が

もうひとつ増えたのは。初めて会ったときにハンカチを借りたその時から？ それとも一言二言の短い会話を交わすうちに？ 理由はどうであれ、ライツエンシュタインは自分の彼女への想いに気が付いた。

ライツエンシュタインの仕事が忙しくなり、昼休みに仕事を抜け出せない日が続いた。

「イライラしてるな」

彼の同僚が、ライツエンシュタインに声をかけた。ライツエンシュタインは書類の仕分けの作業の手を止めて、同僚の言葉に返事をする。

「そうかな」

「貧乏ゆすりしてるぜ」

同僚はライツエンシュタインの足元を指差した。

「仕事が忙しいのは分かるが、足じゃなくて手を動かさないと仕事は終わらない」

「分かってるよ」

ライツエンシュタインはこの仕事が嫌いなのではない。たまに退屈もするが、やりがいも感じている。

「最近、パン屋に行つてないんだ」

同僚がにやりと笑って、大げさに叫んだ。

「パン屋ならどこにでもあるぜ。ああ！ お前の好きな彼女がいるあのパン屋か！！」

「おい、彼女は関係ない。あそこはパンがおいしいんだ」

「何ていったっけ？ 確か太陽の……」

「うるさいよ」

昼休みに職場を抜け出し、パン屋に走る。ライツエンシュタインは仕事が忙しくなり、それが難しくなつたころ、彼女に言った。

「迷惑じゃなかったら、仕事の終わりに寄つてもいいかな」

夜来れば他の客もいない。これまでよりは彼女と話せる。そんな気

持ちもあった。

「いらっしゃいませ」

ライツェンシュタインは、パン屋の店員さんの鈴が弾んだような声を聞くと胸が弾んだ。それだけで仕事の疲れが吹き飛んだ。パンは売れてしまつて品数が少なくなったが、彼女は彼が好きなパンをいっつも残しておいてくれた。

ライツェンシュタインが海外の港町へ引越すことになったのは、それからしばらく経つてのことだった。

企業の海外進出。ライツェンシュタインが勤めていた会社の新しい社長の意向だった。

数年後、ライツェンシュタインはパン屋「ゾネ」がある小さな町に戻ってきた。仕事が一段落し、長期の休みを取って、戻ってきたのだった。

小さな電車を降りて、懐かしいプラットホームに降り立ったとき、不意に女性の笑い声が聞こえた。振り向くと見知らぬ女性が楽しそうに友人と話している。

「誰を期待しているんだか」

ライツェンシュタインは眩き、小さく笑った。

おとぎ話じゃあるまいし、運命の再会を信じているわけでもない。本当になんとなく、あのパン屋に行きたくなっただけだ。

彼はそう思った。

パン屋「ゾネ」は変わっていなかった。壁の茶色の塗装が少し薄くなっているような気もするが、それ以外はライツェンシュタインの記憶とほぼ変わらない。暖かみに溢れていた。

結局、ライツェンシュタインは「ゾネ」を訪れなかった。扉の前まで来て、ためらってしまった。流れた時が彼の邪魔をした。

ライツェンシュタインは町に残った彼の友人から「ゾネ」の店員、エミリアの婚約を聞いた。そのとき初めて彼女の名前を知ったのだ。

太陽のいらっしゃいませ（後書き）

読んでくださって、ありがとうございました。

片思い、一歩手前。そんな彼と彼女のお話になりました。

言い訳をさせてもらうなら、時間がなかったのです。

悪い部分はたくさん分かっています……。

感想、ご意見、よろしかったら、お願いします。

逆にこのお話の良い部分、あるんでしょうか？

なんてマイナスな考えなのは、ゴールデンウィークがあっという間に終わってしまったから……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0318t/>

太陽

2011年10月8日01時05分発行